



## ケインズとマルサスの悪魔

安川正彬

今年(1977年)である。残る20世紀最後の四半世紀も昨年(1976年)いっぱいその一年目が過ぎてしまい、いよいよ今年からは21世紀にむけて、一步一步近づきはじめた。21世紀を輝かしい世紀とすることができかどうかは、残る20世紀に人びとがどのような行動を起こすかにかかっている。

有限の地球にふえ続ける人類が生き残る道は決して楽観できるものではない。今日の人口の爆発的増加にどう対処するか、いまや人類最大の課題はこの人口問題なのである。われわれが今日人口問題に関心を寄せるとき、これを国民にどのように訴えていくか、ここに一つの大きな課題がある。

わが国では第2次大戦後に過重な人口圧力に悩み、焼野原に多産多死の人口から出発した。そして少産少死の実現には、わずか10数年という他の諸国には類例をみない短い期間でそれを達成した。いまでは、そのハネ返りとして急速な年齢構造の変化のために、人口老年化が身近かに迫ってきた。社会保障の問題にしても、これからが年齢構成のせりあがりのために、大きなやま場を迎えようとしている。国民の要求は大きくなるいっぽうであるのに、経済はインフレと不況とが共存し、慢性化のきざしをあらわしている。これをどう打開するかが当面する最大の関心事となった。

ここで思い起こすのは1930年代の不況である。いまさらいうまでもないが、当時はケインズの出現によって、彼の『一般理論』(1936年)がその解明に貢献した。そこでは政府の介入とそれともなう公共投資の増大に、有効需要と生産力との二つの効果を期待し、完全雇用の実現を夢みたのである。しかし現実はいまや不況は慢性化し、長期化の様相を呈した。いち早くそれを感じとったケインズは翌1937年に優生学会で「人口減退の若干の経済的帰結」と題する講演を行ない、『一般理論』の長期化を計った。

そこで主張されたことは、投資を増大させる長期の要因として人口増加を要請したのである。ケインズはそのとき、人口(過剰)と失業に関連して、二つの関係を次のように述べたのである。「マルサスの悪魔P(人口過剰)が鎖につながれたいま、マルサスの悪魔U(失業)が鎖を切って逃れようとしている。人口の悪魔Pが鎖につながれるとき、われわれは一つの脅威から解放される。しかしわれわれは以前にも増して、資源の不完全利用という他の悪魔Uの脅威にさらされる」と。ここにケインズは有効需要を通じてえられる経済発展の要因として、人口増加の意義を見失ってはならないと警告を発したのである。ヒックスはケインズ『一般理論』が出版された直後に書評を書き、「人口はケインズ氏の切り札である」と述べた。ケインズの時代、すなわち1930年代は人口の面ではすでに少産少死を実現して、経済の停滞とともに、人口も停滞した時代であったのである。

それがいまでは、星は移り時は変って世の中は一変した。1970年代の今日、ケインズ理論が無力な理由の一つは、人口と経済の関係が根底からくつがえってしまったからである。

いまの過密な時代に、もしケインズがふたたびこの世にあらわれて、現実を眺め将来を見通したら、彼はきっと次のようにつぶやくだろう。「マルサスの悪魔Pがふたたび鎖を解いて身近かに迫ったいま、マルサスの悪魔Uも鎖を切って逃れでてしまった。失業の悪魔Uが鎖につながれるとき、われわれは直面している大きな脅威から解放される。それが真実のものとなるためには人口の悪魔Pをいっそう強力な鎖につなぎとめる必要がある」と。

ケインズは近代経済学者のなかで、人口にもっとも強い関心をしめした人であった。